

主 題：チョコレートの箱の中で
 聖書箇所：テサロニケ人への手紙第二 3章16節

今日ごいっしょに学んで行きたいことは、「私たちがどのように平安をもってこの地上での生活を生きて行くのか」ということです。

ある映画の一節にこのようなせりふが出てきます。「人生とはまるでチョコレートの箱のようなものだ、チョコレートを取って口にするまでどのような味か分からない、それと同じようなものだ」と。私たちの人生はその一つ一つを経験するまでどのようなものか分からないものです。私たちの人生に関する理解は限られたものであるから、先のことを知ること、それを明確に理解することはできないものです。このような人生に対する理解の不足が、人々に恐れや不安を抱かせます。私たちの周りには心配することや不安の材料となるものがあふれています。テロへの危惧、最近の食料事情、また、天災、戦争、経済的不況、子どもを取り巻く環境、健康、家族、結婚などと、心配し始めたばかりがありません。私たちはそれらのことに明確な理解を得ることがないゆえに、私たちの心は不安と恐れに満たされて行くのです。今、この日本の社会で問題になってきていることは、このような不安や恐れが満ちているがゆえに、人々が精神的に落ち込んでゆく状態、「うつ」になっている人が多いことです。もし、あなたが、またあなたの周りで、そのような不安を解決できない方がおられるなら、今日、良い知らせがあります。パウロは、私たちの不安、恐れに対して、みことばから、「ほんとうの平安をもって生きて行くこと」を教えているのです。ごいっしょに学んでゆきましょう。

パウロはテサロニケ人への手紙の最後で神に対して祈ります。その祈りの中で、

◎私たちはいったいどこにほんとうの平安を見つけることができるのか、

◎どのようにしてこの平安を得ることができるのか、

◎どのようなときにその平安が私たちに与えられているのか、

そのことを見ることが出来ます。私が心から願うことは、私たちがみな、心を合わせて御霊の働きに信頼してこのみことばをしっかりと理解してゆくときに、私たち自身の人生が不安や恐れではなく、神が与えてくださる平安に満たされたものへと行って行くことです。

IIテサロニケ3：16「どうか、平和の主ご自身が、どんなばあいにも、いつも、あなたがたに平和を与えてくださいますように。どうか、主があなたがたすべてと、ともにおられますように。」

パウロが祈り、願っていたことははっきりしています。「平和」です。ここで2回使うことによって(2回とも定冠詞が付いています)、ある特定の「平和」について教えるのです。テサロニケの人たちが、神から与えられる「平安」に満たされて生きようというのがパウロが願ったことです。この「平和」ということばは日本語で「平安」と訳されることがあります。同じことばです。

1. この平安をどこに見つけることができるのか

「キリストのうちに」見つけることができるとあります。ここで覚えることは、この平安は私たちのうちにも、また私たちの周りにもないということです。平和、平安な状態とは、静けさとか平穏さ、落ち着き、幸福、満足、精神的肉体的に健全な状態であると考えます。私たちが願っている通りに物事が進んでいるとき、私たちの心は平安だと考えるのです。しかし、そのような定義はパウロがここで語っていることとはまったく別のものです。このような平和、平安は私たちが作り出すことができるものです。たとえば、薬によって、お酒によって、昼寝をすることによって、何かすばらしい祝福をいただいたとき、贈り物、また意図的に自らを偽ることによっても平安を見出すことができます。友人の心からのことば、愛する人からのことば、など。けれども、このような幸福はパウロが語っていることとは別のものです。これらは時と場合によって移り変わって行くものです。消え去ってゆきます。その満足は一時的なものに過ぎません。しかし、パウロがここで語っている幸福というのは、永遠に続くものであり、私たちの感情や環境に支配されているものではないのです。

このテサロニケの人たちの状態はどのようなものでしょう？3章には、教会の中に怠惰を貪る人たちがいて教会の輪を乱していたことが記されています。2章を見ると、人々は主の日がもうやって来たのかもしれないと言って落ち着きを失い、心騒がせていた様子が書かれています。1章ではテサロニケの人たちが様々な迫害の中にあつたことを見ることが出来ます。彼らの状況は平安を得るような状況ではありませんでした。パウロはそのような中で人々に神の平安が与えられるようにと祈るのです。平安は人間の努力や意志によってもたらされるものではないとパウロは言います。私たちはときに、自分にと

って最善と思う生涯を過ごすときに平和が平安が与えられていると思うことがあります。また、周りの人間関係がスムーズに行っているとき平安だと考えます。自分の願っているものがすべて手に入れることができているなら平和だ平安だと考えることもあります。

しかしパウロがここで語っていることは、様々な人生の困難の中にあっても、チャレンジにあったとしても得ることができるものなのです。それは、私たちの周りの状況や環境によって与えられるものではありません。また、私たちのうちに見出されるものでもないのです。では、いったいどこで見出されるのでしょうか？パウロは言います。平和の主ご自身が与えてくださるものだと。永遠に続く真の平安を与える方は主イエス・キリストご自身しか居られないのだと。原文を見ると、この文は「ご自身」ということばから始まります。これはパウロがこの「主」を強調しているからです。キリストにだけほんとうの平安があることを強調するのです。新約聖書にはこの「平和の主」ということばはこの箇所にはしか出てきません。他の箇所では「平和の神」となっています。ペリピ4：9では「**あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。**」と、また、ローマ15：33「**どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。**」、同じく16：20でも「**平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。**」とあります。しかし、パウロはここでは「平和の神」と言わずに「平和の主」と言います。「主」とはだれを指すのか、このテサロニケの手紙第二を見るとよく分かります。そこで「主」と使われているのは「主イエス・キリスト」を指すのです。どこに平和を平安を見出すのか、それは主イエス・キリストだとパウロは言うわけです。

イエス・キリストだけが私たちに平安を与えるその理由

(1) キリストの働き

私たちが途絶えることのない永遠に続くその平安を得るためには、キリストの成してくださったそのみわざを受け入れなければなりません。エペソ2：14-17を見ましょう。「**キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、：15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまな規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、：16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。：17 それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。**」と、また、ローマ5：1には「**ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。**」とあります。これが、なぜキリストだけが私たちに平和を与えるその源であるのかという理由です。私たちの生涯がいかに困難な苦しみに満ちたものであったとしても、私たちの永遠の場所は天であることをよく理解しているなら、またそれがキリストのみわざによって与えられていることを知っているなら、私たちが生涯のどのような問題にぶつかったときにも、平安をもつことができます。「**万国はやがて来たらん、うれいは永久に消えて、かがやくみ顔仰ぐ、いのちのさちをぞ受けん。**」と賛美しました。だから、恐れることも悩む必要もないのだと。

もし、イエス・キリストを通して神との平和が与えられていなかったとするなら、そこにはほんとうの、永遠に続く平安をもつことは絶対にできないのです。なぜなら、私たちはみな、さばきをもっている罪人であるからです。事実、神は神との和解を為していない罪人たちが決して平安をもつことがないことをみことばを通して教えています。イザヤ57：19-21「**わたしはくちびるの実を創造した者。平安あれ。遠くの者にも近くの者にも平安あれ。わたしは彼をいやそう。**」と主は仰せられる。：20 **しかし悪者どもは、荒れ狂う海のような。静まることができず、水が海草と泥を吐き出すからである。：21 「悪者どもには平安がない。」と私の神は仰せられる。**」もし私たちがこの平安をもって生涯を歩みたいと願うなら、私たちは救われていなければなりません。神と敵対関係にある人間は心からの平安をもってこの生涯を過ごすことはできないのです。どのようなときにも揺るがないほんとうの平安を持つことができるのは、このイエス・キリストのみわざを受け入れ信じ、神に従って歩む者だけなのです。だからパウロは言うのです。平安はイエス・キリストにしかない。

(2) キリストの人格=性質

真の平安はイエスのみわざだけではありません。イエス・キリストがだれなのかということにも掛かっていました。イエス・キリストご自身も平安に満ちたお方です。イエス・キリストは神です。この方はすべてのものを支配されている主権者です。ですから、イエスが願っておられることが行なわれないことなどないのです。神であられるから全能であり、何一つできないことはありません。また、全知であられるから、知らないことは何一つないのです。神の属性をもっておられるからイエス・キリストには完全な平安があるのです。だから、私たちはこのキリストに平安を求めるべきなのです。パウロは言います、「平和の主ご自身」と。私たちが人生の困難の中に、チャレンジの中にあるとき目を向けるの

はこのイエス・キリストのみであることを覚えるべきです。

2. どのようにして平安を得ることができるのか

私たちは平安を得るために何かをしなければならぬのでしょうか？パウロのことばに私たちは励まされます。この平安は神からの贈り物だと言うのです。「あなたがたに平和を与えてくださいますように」と、神が備え与えてくださるのだと言います。この「与える」ということばの動詞の形は「祈願」を表わします。ギリシヤ語の文法の本によると、これは非常な尊敬に満ちた願いであって、必ず与えられると確信した願いであると説明しています。パウロはこのテサロニケの人々がどのような状態にあっても神は必ず人々に神の平安を与えてくださると確信していたのです。また、この平安は私たちの力で得られるものではないことを教えます。本当の平安は主ご自身からのみ彼の民に対して与えられるものです。ダビデはこのように言います。詩篇29：11「**主は、ご自身の民に力をお与えになる。主は、平安をもって、ご自身の民を祝福される。**」と。父なる神がそのことを約束してくださっているのですが、子なる神もこのように約束を与えておられます。ヨハネ12：27「**わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。**」、私たちが神の民であるから祝福として平安を与えてくださるのです。また、聖霊なる神も同じように私たちに平安を与えてくださいます。ガラテヤ5：22には「**しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、**」と「平安」が御霊の実であることを教えています。私たちが聖霊に満たされて歩んでゆくと、私たちに平安が御霊の実として豊かに実って行くのです。パウロはローマ8：5、6でこのように言います。「**肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。：6 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。**」と。三位一体の神が私たちに平安があるように働いてくださっているのです。ですから、私たちはこの神にほんとうの平安を求めて行くべきなのです。

パウロの祈りを見るとき私たちが気づくべきことがあります。パウロはこのようには祈っていません。「どうか平和の主ご自身が、テサロニケの人々の困難な状況を取り除いてくださって、彼らに平和が与えられるように」と。私たちはどうでしょう？問題が取り除かれて平安が与えられるようにと願わないのでしょうか？それは、問題がある限り私は平安をもつことができないと考えているからです。しかし、ほんとうの平安は困難の中にあっても与えられるのです。神がそれを与えてくださるからです。私たちにほんとうの平安を与えるために働き続けてくださっている神への信頼、それが平安を得るカギなのです。それが答えです。

3. 平安はいつ与えられるのか

パウロは「平和の主ご自身が、あなたがたに平和を与えてくださいますように。」と祈りましたが、それに二つのことばをつけ加えました。「**どんなばあいにも**」と「**いつも**」ということばです。このことばが私たちにいつ神から平安が与えられるのかを教えています。

「**いつも**」＝原文では「すべての」と訳されることばが使われています。すべての時間、ありとあらゆる時ときということばです。神が与えてくださる平安は決して途絶えることがない、神からの平安は常に流れ続けているというのです。こころと思いのうちにこの平安をもつこと、それはクリスチャンにとって、継続的に起こっていく体験であるはずで、パウロは、まさに主がそれを成してくださるように願い祈っているのです。ここで私たちは自分に大切な質問をしなければなりません。それは、このような継続的な平安をもっているか？ということばです。心配が心を占めたり、先のことに恐れをもってしまったり、それがいいのでしょうか？それはいったい何なのでしょう？神の約束は確実にあるのに…。私たちがキリストから目を離し神の祝福ではなく、この世の幸福の基準に囚われてしまうとき、私たちは間違っているのです。もう一度思い起こすことです。平安は神からの贈り物であり、神の民に対してのみ与えられるものだ。神の民とは、神を愛し、信頼し、従う人です。聖霊の支配に私たちのこころと思いのすべてを委ねて行くとき、この神の平安に満ちた歩みができるのです。

では、私たちが御霊に従った歩みをしていることがどうして分かるのでしょうか。それは主が喜んでくださる歩みをするということです。つまり、みことばに従った歩みです。レビ記にはこのように教えています。26：3には「**もし、あなたがたがわたしのおきてに従って歩み、わたしの命令を守り、それらを行なうなら、**」とあり、4節からは様々な祝福があることを見ます。「**：4 わたしはその季節にしたがってあなたがたに雨を与え、地は産物を出し、畑の木々はその実を結び、：5 あなたがたの麦打ちは、ぶどうの取り入れ時まで続き、ぶどうの取り入れ時は、種蒔きの時まで続く。あなたがたは満ち足りるまでパンを食べ、安らかにあなたがたの地に住む。**」。そして、6節には「**：6 わたしはまたその地に平和を与える。あなたがたはだれにも悩まされずに寝る。わたしはまた悪い獣をその国から除く。剣があなたがたの国を通り過ぎることはない。**」と、神の民が神に従って歩むとき、神の平和は間違いなく与えられると言うのです。その反対の場合はどうでしょう？14－16節、「**：14 もし、あなたがたがわたしに聞き従わず、これらの命令をすべて行なわないなら、：15 また、わ**

たしのおきてを拒み、あなたがた自身がわたしの定めを忌みきらって、わたしの命令をすべて行なわず、わたしの契約を破るなら、:16 わたしもまた、あなたがたに次のことを行なおう。すなわち、わたしはあなたがたの上に恐怖を臨ませ、肺病と熱病で目を衰えさせ、心をすり減らさせる。あなたがたは、種を蒔いてもむだになる。あなたがたの敵がそれを食べる。」。神の民であるイスラエル、彼らに与えられていた祝福は彼らが神の前にいかに忠実であったかということに掛かっていたのです。今も同じ基準があります。パウロはこのように言います。ローマ2：9－10「患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上に下り、:10 栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。」と、神の前に善を行なう者の上に平和があると。ですから、私たちが恐れや不安に自分のところが支配されるとき、自分を吟味しなければならないのです。私は神の前に忠実であるかどうか？と。パウロはピリピ人への手紙で命令を与えています。4：6－9「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。:8 最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。:9 あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。」

「思い煩う」ことも主の前には罪なのです。その罪を悔い改め、神に目を向けて神が教えてくださっていることを実践して行きなさいと言うのです。

いつ与えられるのか、もう一つのことを見ましょう。

「どんなばあいにも」＝どのような状況にあってもと言います。様々な人生の経験の中で、神の平安は与えられるのだと。すばらしい信仰者の歩みを見ると、彼らがこの世にあってどれほどみじめで不成功なことばかりであっても、彼らは心からの平安を持ち続けて生きて行ったことが分かります。パウロもその通りです。ほんとうの平安は決して変わることはない神と私たちとの関係の上にあり、神のすばらしい計画と約束のうえに神が揺るぐことのない平安という砦を、私たちのところに建ててくださっているのです。私たちの主は信頼のおける方であり、主は私たちを憐れみ、慰め励ましてくださるのです。イエスは私たちにそのことを思い起こさせようと、山上の説教の中でこのように教えておられます。

マタイ6：25－34「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。:26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。:27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。:28 なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。:29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。:30 きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくして下さらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。:31 そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。:32 こういふものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。:34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」

神は私たちの必要を満たしてくださる方です。私たちが心配することは、私たちが神の国に仕える者としてしっかり生きているか、神の義がこの地上において、私たちの生活の中で明らかに現わされているかどうかということです。それをしているなら、他のものは何も心配することはないと言われるのです。

パウロはこの祈りの最後に「主があなたがたすべてと、ともにおられますように」と言っています。私たちが得ようとするこのほんとうの平安というのは、主キリストご自身にありました。私たちが常に主がともにいてくださることを理解し覚えて行くなら、この平安にいつも満たされて、生涯を生きていくことができると教えるのです。

私たちの人生はチョコレートの箱のようなものです。そのひとつひとつがどのような味であったとしても、神が私のために特別に備えられたものだと思えるとき、私たちは神を信頼し、心からの平安をもって生きることができるのです。